戦争について考える

大城　想空

今年、新型コロナウイルスの影響で学校が休校になり、社会の先生から宿題が出されました。

先生からもらった宿題に戦争について身近な人にインタビューするというものがあり、私は今年九十才になるひいおばあちゃんに戦時中の様子、戦後の出来事についてインタビューしました。

戦争は、ひいおばあちゃんが十代のころにありました。

家の近くに読谷飛行場ができ、父は兵隊としてつれていかれたそうです。

十月十日になると空襲が激しくなり、国頭村にひいおばあちゃん達と祖母と姉二人の二組みに分けられて祖母と姉二人とは別ののまにげました。

国頭村の避難小屋についたが、そこもすぐにダメになり、山に何人かで穴をほり、そこ

読谷中学校　二年

コクヨ　ケ-10　20×20

に隠れていたそうです。

結局、ひいおばあちゃん達はほりょになり、助かりました。

しかし、戦後も栄養失調やマラリアという病が流行ったりして、次々と人が亡くなっていったそうです。

私は、ひいおばあちゃんの言った、「沖縄を防波提に使われたようだ。」と、いう言葉も心に残りました。

その言葉からは、当時の日本への怒りが感じ取れました。

私はその話を聞いて、「戦争はやっぱりしたくない。」と思いました。

小学校のころから何度も話を聞いてきて、私は、この話を聞くたびに、当時戦争について正しい知識があったのなら、ここまで死者がでなかったかもしれないと考えます。

また、私と同じ歳ごろの少年少女が戦争にかりだされたことについてもやはり、「国のために命をしという教えがなければ、若くし

て亡くなってしまう人が減ったと思います。

私は、このように戦争で苦いうちにとくなりたくはないし、友達、家族が死んでしまうのも見たくありません。

だから、私は、二度と戦争が起こらないように、自分にできるはんいで、政治に関心を持ったり、勉強をちゃんとしたりします。

それと、直接体験談を聞くという貴重なこともできているので、それを後生に伝えていきたいと思います。

コクヨ ケ-10 20×20